

第4節 小括

本章では、まず「青少年の社会的自立に関する意識調査（青少年調査）」に回答した独身者を「求職型」無業者67名、「非求職型」無業者58名、「非希望型」無業者32名、正社員・正職員871名、非正規社員557名に類型化し、無業者の生活と意識を有職者と対比しながら考察した。次に、各類型の両親の状況を確認した後、青少年調査と親調査をマッチングし、両親ともいる青少年について、青少年の類型別に、「求職型」無業者の親46名、「非求職型」無業者の親39名、「非希望型」無業者の親19名、正社員・正職員の親627名、非正規社員の親384名の考え方をみてきた。ここで明らかになったことは、以下のとおりである。

- (1) 最後に通った学校は、「非希望型」及び「非求職型」で中学あるいは高校である者の割合が6割を超えて高い。
- (2) 日常生活の状況を見ると、無業者は親との同居が9割を超え、経済的にも親に依存している者が多い。生活時間帯は有職者よりもやや遅めである。なお、健康を害している者が2～3割に上る。
- (3) 対人関係を見ると、無業者は自分の意見を人に説明したり、よく知らない人と自然に会話することに対する苦手意識が高い。友人の状況については「非希望型」では、小学校時代以前からの友人が少なく、友人はいないとする割合が他の類型よりも高い。また、「非求職型」と「非希望型」では身近な人間関係を大切にしているとする割合が他の類型よりも低く、携帯やメール等への依存度が低い。
- (4) 社会に対する関心・考え方を見ると、「非求職型」では、「社会で問題になっていること」や「世界情勢や国際問題」に対する関心度が他の類型よりも高い。一方「非希望型」では、社会問題に対する関心の低さが目立ち、社会に問題があるという意識も薄い。
- (5) 自分自身の現状と将来についての考え方を見ると、現在の生活の満足度は無業者は有職者よりも低い。無業者の中では「非希望型」が最も満足度が高く、次いで「非求職型」、「求職型」の順である。大人になった自覚の有無については、「非求職型」及び「非希望型」で大人になったと感じていない者が2割を超える。「非希望型」の約3割は結婚するつもりがなく、将来の夢がない者も25%に上る。一方で夢を持っている「非希望型」及び「非求職型」では、なんらかの形で勉強を行っている割合が他の類型よりも高い。そのためか、悩みや心配ごととして勉強や進学のことをあげる者も多い。悩みや心配ごとについては、この他「非希望型」及び「非求職型」では健康や病気、「求職型」では就職や仕事・お金のことをあげる者が多い。なお、「非希望型」では、「悩みや心配ごとはない」が3割近くとすべての類型のなかで最も高い。
- (6) 両親の状況を見ると、「非求職型」及び「非希望型」では父離死別が多い。親に対する印象については、「非希望型」で父母が仕事や勉強・成績についてうるさく言うと考えている。
- (7) 両親ともいる各類型の親の小学生のころの育て方の特徴を見ると、無業者の親は子どもの希望をできるだけ聞いたとする割合が比較的低い。また、「非求職型」及び「非希望型」の親は子どもにかまってやらなかったとする割合が比較的低いこと、できるだけ外で遊ばせたとする割合が比較的低いことも特徴的である。

(8) 両親ともいる各類型の親の子に対する考えを見ると、無業者の親は「うちの子は親がいないと心配だ」、「うちの子はずっと結婚できない」と思う割合が高く子に対する心配が尽きない。特に「非希望型」の親は、「親は子どもの一生に責任を持つ義務がある」と思う割合が高く、「子どもは放っておいても育つものだ」と思う割合が低くなっており、子にしっかりとかまひ続けようとする傾向がうかがえる。なお、「非求職型」及び「非希望型」の親は子の独立について考えたことがない割合が高い。

以上のように、無業者はその生活及び意識の様々な面において有職者とは異なる傾向を持つ者が多い。また、無業者内部でも親と同居し経済的にも親に依存している者が多い点、対人関係に対する苦手意識が高い点など3類型で類似した傾向が見られる側面がある一方で、友人の状況や人間関係に対する考え方、社会に対する関心、結婚希望や将来の夢、悩みや心配ごとなど類型別に異なる傾向が見られる側面も多く、その多様な実態が観察された。特に「非希望型」無業者は、他の類型とは顕著な違いが見られる点が多く、健康状態を害し、社会や人に対する意識が希薄で、大人になったと感じることがなく、将来の夢がない者が一定数確認された。ただし、「非希望型」無業者の中にも将来の夢に向けて勉強等に取り組む者もいること、さらに「非希望型」無業者は現状の生活に対する満足度が無業者の中で最も高く、悩みや心配ごとがない者がすべての類型の中で最も多いことにも注意する必要がある。

無業者の親の特徴として、子に対する心配が尽きないこと、特に「非希望型」の親は子の一生に対する責任感が強いこと等があげられる。なお、「非求職型」及び「非希望型」無業者の親は、子どもが小学生の頃かまってやったという思いがある一方で、子どもの希望をできるだけ聞いたか、外で遊ばせたかについては自信がないこと、「非希望型」無業者本人は、親が仕事や勉強・成績についてうるさく言うという印象を持っていることから、適度な関わりあいを持たずにいる親子の姿がうかがえる。

無業者の有職者とは異なる傾向やその内部の多様性を踏まえ、家庭や学校、諸機関が青少年に対し、いつどのような関わりを持ち、どのような機能を果たすべきかが検討される必要がある。

参考文献

- 玄田有史・曲沼美恵 (2004) 『ニート フリーターでもなく失業者でもなく』幻冬舎
小杉礼子編 (2005) 『フリーターとニート』勁草書房